

近間満男大尉の詩

川島 順 予科21-7
(越谷市) 航空7-1

昨年、「出口のない海」という人間魚雷「回天」をテーマにしたテレビ映画が放映された。「回天」特攻を志願した主演の市川海老蔵扮する並木浩二等4人の物語である。一発で出撃に成功した者、いざ出撃の命令を受けて乗艦するもエンジン不調により出撃できなかった者さまざまである。出撃に成功し敵艦に体当たりすれば軍神として賞賛されるが、出撃に失敗すれば命は長らえられるものの機械の故障とはいえ卑怯者と蔑げすまされる。その間の苦悩と心の揺れ動きを描いている。

航空兵科に進んだ我々も、何れは特攻出撃するものと覚悟は決めていたし、当時は若かったし、また、操縦訓練も受けていない状態で戦場に行くということが実感として湧いてこなかったせいもあって、死ぬことについてはさほど怖いとは思っていなかった。ただ、心配だったことは、敵艦まで快調に飛んでくれる飛行機が割り当てられるかということだけであった。



近間大尉

このような特攻の話を聞くにつれ思い出すのは、近間満男大尉（57期）の特攻出撃直前に書いた詩である。この詩は矢野宏治が秩父42号（平成6年正月号）で紹介したもので、61期の管野茂君から聞いた話を元にして、近間大尉の人柄や、出撃までの状況などと共に書いている。

近間少尉は、常陸教導飛行師団にいて、昭和20年4月14日特別攻撃隊第53振武隊長を命じられ、成増飛行場で訓練の後、5月16日成増を出発、防府に泊して、5月17日知覧着、翌18日、部下7機と共に知覧基地を発進、沖縄周辺海上の敵艦船に突入戦死、大尉に昇進している。

この詩は、特攻の約1ヶ月前に書いて基地のマスコット少女八重坊に与えたものである。

弱冠21歳、まだ恋も経験しないで特攻に出撃していった近間大尉の心情を思うと胸の詰まる思いがする。

私はまだ恋をしたことがない

しかし それに似た淡い思いだけは

しょっ中胸に抱いている

それは人間の真実性より発する

限りない美しさに対する

憧憬であり 思慕である

今短かりし一生を近く終らんとして

私の感情を左右するものは

ただえだけである